

課題論文（EE）における統一した指導への取組み

教諭 吉澤将大

課題論文（EE）は思考スキル、コミュニケーションスキル、社会性スキル、自己管理スキルおよびリサーチスキルを伸ばすことを目標に、生徒個人で研究を続け論文を執筆する活動である。各生徒には指導教員が配置され、様々な支援を受けることが可能となっている。

本校は県立高校であるという特性上、教員の異動が頻繁に起こり、EEの指導を行ったことのない教員が指導教員となることもある。また勤務時間上EEのグループ会議の時間は設定されていない。この問題点を解決するための工夫として、情報共有をデジタル上で行い、いつでも参照できるようにすることなどがあげられる。以下本校の取組みを一部紹介する。

1 教員がすべきこと・してはならないことの一覧の共有

EEの指導は推奨される指導と、禁止されている指導が事細やかに規定されている。しかしながらEE指導の手引きは230ページ近い冊子であり、すべての教員がそのすべてに目を通すことは現実的ではない。そこで表1のように最も重要な項目についてまとめることで、初めて指導する教員でも安心して指導ができるようにしている。

EE担当者がすべきこと	してはならないこと
グループ（教科）の評価規準を確認し、定期的に生徒と共有する。	「EEハンドブック、生徒DPハンドブックP106～108をよく読んでおきなさい」とだけ指導して、生徒任せにする。
生徒の進捗を確認し、学問的誠実性が疑われる場合はEECへ報告する。	

表1：指導教員がすべきこととしてはならないこと40程度の項目

2 年間スケジュールの共有

EEの執筆は厳密なスケジュールに従って進められる。各月において指導教員がしなければならないタスクを時期毎にまとめることで、各時期に何をすべきなのかいつでも確かめられるようにしている。

月	9月～10月	11月
EECの仕事	<ul style="list-style-type: none"> 夏休み明け研究発表会の割り振り 3年次生のEEをIB機構へ提出。（文字化け等に注意） 	<ul style="list-style-type: none"> ピアリーディングの割り振り。 執筆の進捗の確認。必要に応じてケース会議⇒IB担当者会へ報告。
EE担当の仕事	<ul style="list-style-type: none"> 夏休み明け研究発表会とコメント 振り返りセッション②（10月）を行いRPPFを書かせる。（ここで振り返りセッション①と研究の方向性が変わった場合は、なぜその考えに至ったのかを記述（研究の過程を通じて考え方がどのように変化したのか示せるように）するように指導する） 生徒の進捗の確認。相談（確認セッション）に乗る。 	<ul style="list-style-type: none"> 草稿①の確認。（詳しく読む必要はありません。フィードバックは行わないでください。この時点でまったく書けていない生徒がいた場合は、EECへ連絡。EEC、担当、担任による面談（特別な配慮が必要なのか単に怠けなのか判断）。草稿②（12月末）である程度整ったものが書けるように、積極的な支援・指導。） 生徒の進捗の確認。相談（確認セッション）に乗る。
生徒の活動	<ul style="list-style-type: none"> 執筆 夏休み明け研究発表会の準備と発表 必要に応じて自らアガをとり、確認セッションをお願いする。 振り返りセッション②（10月）を行いRPPFを書く。 CASEE通知表でトピックの確認。 	<ul style="list-style-type: none"> 草稿①の提出 草稿①を同じグループ内の生徒へ送る。草稿①を利用したピアリーディング。

表2：各月において指導教員がしなければならない業務と生徒がしなければならない活動の一覧

3 オンライン情報へのアクセス

本校 IB 生はマネジバックという、Google Classroom とは異なるプラットフォームで学習の調整を行っている。そのため EE の指導のみで IB コースに関わる教員の場合、その操作に戸惑うことがある。本校では EE の指導に必要な操作についてマニュアルを作成することで、いつでも確認できるようにしている。

1 マネジバックへアクセス

2 該当学年を選び、Extended Essayをクリック



3 担当生徒の名前をクリックすると以下の画面になります。(担当を割り当てますので担当する生徒が決まったらEEコーディネーターに伝えてください)

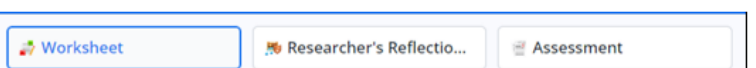


図1：マネジバックへのアクセス方法を説明した資料。このほか、IB 機構の公式資料へのアクセス方法などを図入りで一つずつ解説している。

以上、統一した指導を行うための取組みの一部を紹介した。しかしながら、指導のポイントは各グループ（教科）で異なり、経験のある教員が新しく来た教員に個別に伝達しているのが現状である。各教科の指導の取組みとその情報をいかに共有しながら積み上げていくことができるかが今後の課題である。